

小幡和平の国立銀行経営論

植 村 元 覚

一、は し が き

二、前田孝央等の国立銀行創設願いと通常銀行の設立願い

三、明治初期の国立銀行設立事情

四、小幡和平著「国立銀行ノ利害」について

五、小幡「国立銀行ノ利害」続篇——イ、物価騰貴論 ロ、正貨および紙幣論

付録 福沢諭吉の物価上昇論との比較

六、小幡「国立銀行ノ利害」続篇——動産・不動産論

七、洪沢栄一の国立銀行経営論——とくに小幡文庫の中に発見された洪沢の「銀行説」——とその影響

八、あ と が き

一、はしがき

金沢国立第十二銀行（現在の北陸銀行の前身）の初代頭取である小幡和平は、加賀前田藩の家臣であり、蔵書家であり、貨幣についての内外の資料の熱心な蒐集家であった。彼の蔵書は石川県立図書館に保蔵されているが、殆んどその内容については知られていない。筆者は、たまたまこの7百余冊の蔵書に接し、その中に小幡和平の著作もあることを知り、敢えてその中の一篇「国立銀行ノ利害」を紹介して、国立銀行の経営者になる数年前に書かれた本書によって、銀行経営についての準備のために調査・研究の相当に優れた努力がなされていたことを明らかにしようと思う。

国立銀行は、明治5年11月15日太政官布告第三四九号によって、銀行紙幣を発行する特権をもつと共に、普通銀行業務をも営むものとして「国立銀行条例」によって政府から設立されることになった。こうして国立銀行が、この条例によって、全国の各地方に設立されることになり、北陸には、金沢にまず第十二国立銀行が創設され、その頭取として小幡和平が就任することになるのであるが、彼のほかに国立銀行、さらには私立銀行の設立を請願する者もないわけではなかった。国立銀行の設立に困難な条件のときは、私立銀行としての「通常銀行」即ち国立銀行でない銀行である普通銀行の設立①を願出ることがあった。即ち「明治・大正財政史」第一四巻によれば②明治8年3月紙幣頭得能良介の正院へ提出した普通銀行条例制定の建議書では、通常銀行と称せられ、この私立銀行の「設立ヲ請願スルモノ年々遂フテ増加シ」③たのであった。これについて政府は「追テ一般ノ会社条例制定相成候迄人民相對ニ任セ」ることとされた。

本稿は、小幡和平の著といわれる「国立銀行の利害」を中心にして、その内容とくにその経営についての考え方を問題とするのであるが、このころの同じ金沢から設立をお願いした前田孝央等の

「通常銀行」の設立計画についても述べて、当時の企業経営の一端に触れたいと思うのである。

- 1、後藤新一、銀行条例の精神と普通銀行の歩み（東畑精一、高橋泰歳監修「日本の銀行制度確立史」八頁）
- 2、明治大正財政史、第十四巻、二六頁
- 3、明治財政史、第十二巻、四九二頁

二、前田孝央等の国立銀行創設願いと通常銀行の設立願い

(1) その経緯

小幡和平等による国立銀行の創設のほか、既に明治8年に前田孝央などからも創立願いが提出されていた。即ち同年4月に石川県商・庸川幸七、石川県士族、小野欽哉、同内藤誠、同不破真順、同前田孝央から紙幣頭得能良介に対して願いでたが、営業上困難であるとして許可されなかった。それで12月再び願出が提出された。①この件について日本金融史資料明治大正編では、この「再願ノ儀ニ付指令及回答伺」として紙幣頭から石川県権令へ次のように回答案が記載されている。

12月24日上達

明治8年12月23日 銀行課 中属 外山修造

卿

輔

丞⑩ ⑩議案 課⑩

12月23日議へ

紙幣頭⑩ 助⑩ ⑩属⑩⑩

石川県前田孝央外四名ヨリ当4月中国立銀行創立ノ儀出願有之候処国立銀行ノ儀ハ今営業上困難ノ次第モ有之ニ付他日発行可相成銀行条例ニ照準追テ創立可致旨説諭致シ置候処今般猶又別紙之通該条例御発行ノ日ヲ俟テ徒ラニ株金ヲ積置候テハ特リ損失ノミナラズ大ニ同志ノ氣鋒ヲ挫折シ且ツ種々流言ニヨリ疑惑ヲ抱ク者モ不尠折角結約候ヲ土崩尾解ニ至リ候テハ実ニ浩歎ノ至ニ付別紙申合規則ヲ以テ差向キ営業致度趣願出候処該条例ノ儀ハ既ニ正院へ御上申ニ相成居不日御発行ニ可相成候得共前頭ノ景況ニ付暫時モ其儘難差置候間是迄御指令相成候例規ニ從ヒ左之通及指令度且ツ別紙石川県権令ヨリ依頼書ノ回答案トモ併テ相伺候也

指令案

願ノ趣追テ一般ノ条例御発行相成候マテ相對ヲ以テ結社營業候儀ハ不苦候事

明治8年12月 日 紙幣頭

石川県権令へ回答案

御県士族前田孝央外四名ヨリ銀行創立出願ノ儀に付発起人共身元保証等ノ儀御申越有之候処右ハ条例御頒布ノ上更ニ御掛合ノ品モ可有之候得共差向相對ヲ以テ結社營業候儀ハ不苦旨及指令候間右様御承知有之度此義及御回答候也

月 日

得能紙幣頭

桐山石川県権令殿

右のように前田孝央外四名からの創立願については、現在は認められないけれども後日には可能性がある、しかし既に設立を見越して資本金を積立ててある以上は、これを其儘に放置しておくことは却って不都合ともみられるのであって、紙幣頭としては「結社営業」即ち通常銀行頒布まで会社創立することは苦しからざることとして許可せれる旨の指令を出している。

なお、このような「通常銀行頒布迄会社創立」の目的については、前記前田孝央外四名から、紙幣頭得能良介殿あての願書に次のように述べている。②

（前略）……元来加越能三ヶ国ノ儀ハ以前列藩ノ頃ハ一藩独立ノ国制ニテ庶人ニ至ルマデ他国取引等敵敵法則モ相立居容易ニ他国取組等ハ不仕土地柄ニテ唯藩内而已ニテ取引受際（授カ）等致来候固陋未開ノ人民殊ニ僻遠ノ地ニシテ目今ノ形勢ヲ偵視スルモノハ実以テ少ク今日ニ至リ候テモ、其幣風専難脱追日漸次衰微ノ景況ハ勿論邂逅金ヲ所有スルモノハ瓦石モ同様蔵置致置其用ヲ成サス融通閉塞終ニハ破産衰業ノ勢ニ可立至ト歎息ノ余リ当春銘々申合銀行条例ヲ遵奉シ融通至便ノ道ヲ得サシメ漸々物産繁殖固陋衰微ノ人民ヲシテ往々開化富有ノ地ニ立至ラシメ度志願ヨリ追々説諭創立同志輩募集ニ及候処一旦奮然気配等相進ミ目今数十万円ノ株金条約ニハ立至候…（後略）

右の表現は可成り極端であるが、地域経済の発展のために役立てる目的をもって銀行業の創立を希望するとしていることは明らかである。思うに加越能三ヶ国は恰も一藩独立の国制とするのは歴史的、地理的に理解できるとしても、他国取引を極度に制限した封鎖的商業国家のような「藩内而已ニテ取引」するという表現は事実関係と著しく異なっており、加賀藩自身も領内産の米を大阪に送り、所謂登せ米制度が確立し、領内の港々から多量の米が輸出されており、銭屋五兵衛、綿屋彦九郎など日本海を縦横に活躍した海運業者があり、「未開ノ人民殊ニ僻遠ノ地」という言葉は当を得ていない。資金運用の知識乏しく「瓦石モ同様」との表現も同様に極端である。

（2）通常銀行頒布迄「会社」の創立申合規則について

明治8年12月前記石川県士族前田孝央外四名から紙幣頭得能良介に「通常銀行頒布迄会社創立申合規則書按」③が提出された。ここに会社というのは、当時は銀行の名称は国立銀行についてのみ許されていて、（明治5年制定の「国立銀行条例」第二二条による）、そのほかは銀行の名称を使用することができないために、「会社」の名称をつけたものと考えられる。また政府はその社則を検討して公益を害しないと判定されれば「府県限り聞届」けて許可することとされた。なお明治8年3月紙幣頭得能良介は、「通常銀行条例」を制定するよう当局に建議したのであったが、これは「一般会社法制定ノ後ヲ俟チテ之ヲ発布スルモ未ダ遅シトナサズ」④という理由で延期されることになった。

この会社の目的、営業内容、機能および機構の主なる点は次の通りである。

余輩茲ニ政府ノ通常銀行条例規則ヲ頒布アルヤ直チニ此業ヲ興サンコトヲ発起シ開業迄ノ手順発起人ハ既ニ株金ノ半高ヲ積立テ総株主ト共ニ左ノ数条ヲ仮ニ誓約シ各姓名ヲ自記シ実印ヲ調シ背ナカラシメテ表セリ

第一条

資本ハ百万円ノ目的ヲ以テ即今三拾万円ト定メ一株百円トシ株数ヲ三千ニ分ツヘシ

第二条

右会社ニ於テ施行スル所ノ事務左ノ如シ

一、当座預り金ヲナス事

一、時限ヲ期シテ金ヲ預リ之ニ利足ヲ附与スル事

一、古金銀并ニ地金（通用貨幣ニアラサレハ古金銀ト雖トモ皆地金ノ部ニアリ）ヲ売買シ又ハ借用証書荷為換等船荷送状売買品等ヲ抵当トシテ当座貸金ヲナスヘキ事

一、諸証券及ヒ其他宝物等ヲ預リ之ニ預リ証書ヲ出シテ其安全ヲ請合又世人ニ代リテ公債証券或ハ古金銀及ヒ地金等ヲ買入レ又ハ之ヲ売捌等ノ事ヲ取扱又割符金養老銀及ヒ給料払方等ヲ請取りテ之ヲ算計シ受渡ヲナスヘキ事

（以下省略）

右のように普通銀行業務を行なうものであり、取締役は五名とし、株式を三十株以上を所有する者とされ、その下に、現場の事務は支配人、副支配人、勘定役、書記役等により行なう。総株主集議は年二回とする。また予備金は半年毎に利益一割を貯蓄し、資本金の二割に達すれば利益金を分配する。株金徴集の日限は明治9年3月30日と定め、初めは本店のみで開業し、漸次支店の事業を開くこと、株金徴集の本拠は金沢市尾張町八十番邸とすることなどを定めている。

このような計画書が作成され、資本金三十万円の通常銀行を金沢市に設立しようと努力した。ところが明治9年8月に至って、太政官布告第一〇六号により、「国立銀行条例の改正があり、国立銀行のほかは銀行の名称を使用することの制限が解除され、私立銀行設立の道が開かれることになった。これより先、私立銀行として三井組は、三井一族の資産で官金出納諸為換等を営み、また「民間ノ信用既ニ厚ク其資力確実⑤」という特殊な事情により、明治9年7月に、三井組の業務を引きついで資本金二百万円の三井銀行が創立された、これがわが国で最初の私立銀行であることは衆知の通りであるが、その他の通常銀行は、この年には創設が許可せられなかった。⑥金沢で最初の銀行は、金沢国立第十二銀行であり、それは資本金二十万円を以て明治10年8月26日に開業した。こうしたわけで前田孝央等の計画した通常銀行迄の会社も設立は実現しないままに終わった。

1、日本金融史資料明治大正編第三卷五五一頁

2、同書 五五三頁

3、同書 五五四頁

4、前掲明治財政史五六六頁

5、大蔵省理財局銀行課「銀行便覧」四九六頁

6、もっとも明治9年8月には、国立銀行条例は改正になり、同条例第二二条の規定は削除され

た。これにより国立銀行のほかは「銀行」という名称を使用することの禁止は無くなることになり、私立銀行設立の方向は醸成されたが、明治10年、翌11年は各地に国立銀行が多数設立され、遂に私立銀行は設立せられなかった。

三、明治初期の国立銀行設立事情

明治5年の「国立銀行条例」により、国立銀行が設立されたが、これは株式会社の形態、資本金の最低額（人口十万以上の都市では五十万円、人口十万未満一万人以上の都市では二十万円が原則）銀行紙幣の発行を規定し、営業の本務は「為替両換約定為替荷為替預り金其余引請貸借又ハ引当物ヲ取りテ貸金ヲナシ貸借証書其他ノ諸証書及貨幣地金ノ取引等」①と規定された。

このような銀行条例の趣旨からして、加藤俊彦氏が述べるように②それは政府はイギリス的な商業銀行をねらっていたものとみられる。加藤氏はさらに「本邦銀行史論」③において「政府の方針としては、国立銀行ならびに普通銀行にたいしては、これらを商業銀行として発展させようとしていたのであった」と断定している。

いまひとつの特色は銀行紙幣の発行が認められることである。当初は資本金の六割の額の政府紙幣を政府に納入し、政府からはその額の金札引換公債証書を受け、これを抵当として同額の銀行紙幣を発行することができた、そして資本金の四割を正貨で銀行が準備し、銀行紙幣を発行するが、発行高に対する正貨準備の比率は六対四であり、相当に高かった。金札引換公債証書は年六分の利子がつき、加えるに公債証書と同額の銀行紙幣を発行して貸出運用即ち年利率一割をあげるならば公債証書の分としての六割分の六即ち三分六厘と銀行紙幣の分としての六割分の一割即ち六分合計九分六厘の利益をあげることができる。さらにこの他の業務から生ずる利益もあり、年一割以上の利益が予測された。この利益は、政府の財政、金融政策としての国立銀行の創設理由の「巨額ノ不換紙幣ハ銀行ノ手ヲ経テ大蔵省ニ回収セラレ同時ニ正貨兌換ノ銀行紙幣代リテ市場ニ流通スルコトナルヘク政府ノ素願タル財政ノ整理ト金融ノ疏通トハ巧ニ本条例ニ依テ達セラル」④ことと相まって、経済政策と適合した経営対策がとられた。

しかし正貨兌換の銀行紙幣は発行の素地がなく、国立銀行の設立は、四行にすぎなかった。事実、輸入超過となり、正貨流出し、政府の不換紙幣が増発され、明治8年には政府紙幣は金貨千円について一七円の打歩を加えねばならなかった。また銀行取引は少なく、総預金の中で官公預金の比率が五〇％内外をしめるほどに高く、国立銀行の経営は困難であった。このために明治9年8月国立銀行条例が改正され、最低資本金の法定額を緩和して人口十万人以上の都市では二十万円、十万人未満の地方では十万円を原則とし、銀行紙幣発行限度が拡張されて資本金の八〇％とされ、また正貨兌換を改めて政府不換紙幣と引き替えることとされ、銀行紙幣発行高の四分の一の政府紙幣を準備すればよいことになった。かくて銀行紙幣は正貨兌換から政府不換紙幣に引き換えられ、また銀行紙幣発行のわくも拡大された。さらに華士族の金禄公債の活用方法を講じて、抵当の対象とし銀行紙幣の発行を認めて金禄公債出資による国立銀行の設立が可能になり、各地に創設のブームが勃興した⑤。明治9年から12年にかけて全国的に国立銀行が雨後の筍の子のように出現した。

その数は百五十三に達した。

なおここでは国立銀行の経営問題について考究することが目的ではない。この問題に接近するためには、資本金出資構成としての通貨出資と金禄公債出資との割合、銀行紙幣発行高、あるいはまた「人民預金」と称した一般預金と「御用預金」といわれる官公預金の増減、そして貸出金構成やその担保別構成たとえば国債証券、株券、地所家屋、穀物、雑品、信用などの問題、銀行の預貸金、借入金や預貸率などについて触れなければならない。しかし本稿は国立銀行の在り方についての見解を示すことが目標であり、小幡和平の立場を明らかにするための前置きとしてこれに触れるにとどめた次第である。

- 1、国立銀行条例（太政官布告第三四九号）第一〇条第一節
- 2、加藤俊彦「銀行条例について——本邦普通銀行の性格に関連して、（『経済学論集』第一七巻第三号）
- 3、加藤俊彦著、本邦銀行史論、一二六頁
- 4、明治財政史、第一三巻一〇一頁
- 5、例えば、加藤俊彦、大内力編著「国立銀行の研究」。朝倉孝吉、「明治前朝日本金融構造史」、第二編、第一章「国立銀行の濫立とその設立者、機能、性格」

四、小幡和平著「国立銀行ノ利害」について

小幡文庫の蔵書の中に、彼の著書とみられる「国立銀行ノ利害」がある。和綴で毛筆でかかれ、十六枚からなっている。本書は、その中に「国立銀行ノ利害」、「諸品物価ノ騰貴」、「正貨楮幣ノ開差」、「動産不動産ノ得失」の項目があげられていて四節から成っている。しばしば説明文が二行にして小さい文字で文中に差し入れられていること、また文中の文字を消してその横に適当な文字を加筆していること、さらに数ヶ所であるが、文の上に註のような形で説明が加えられていることなどからして、これはなお完成した書物とはいえない、しかし文字の形は整っており、一応清書されている。

ただし本書にはその成立ないし成稿の期日は記入されていない、完成稿でないためでもあらうと思われる。いま文中の叙述によってこれを推察するならば、明治七年の線に落着く。即ち第一には、文中に「去明治六年中各銀行決算書ニ……とあること、第二に銀行条例を述べて「其募金ノ四分ハ本位金貨ニテ積立置紙幣引換ノ準備ニ充テ募金ノ六分ヲ大蔵省ニ納メ公債証券ヲ受取り……」とあることの二つの点があげられる。明治9年には「国立銀行条例」改正になるが、第二点は改正前の条例であり、これによって論述されているからである。

なお本書は、和紙に書かれてあり、文章の切れ目もない。以下の引用文は、これが今日まで全く紹介されないままにあったので、そのまま記述することにする。ただし筆者において節の切れ目を読みとり、仮りに若干の節に分けて示すことにする。

条例第十一条
第六節

国立銀行ノ利タルヤ其維持興廃等ノ事ハ暫ク指置銀行条例中ノ計算ヲ以テ之ヲ概言スルニ其募金ノ四分ハ本位金貨ニテ積立置紙幣引換ノ準備ニ充テ募金ノ六分ヲ大蔵省ニ納メ公債証書ヲ受取り年六歩ノ息ヲ得（百円ニ付六円ナリ）尙又右証書ヲ抵当トシテ紙幣寮ヨリ証書ノ全額銀行紙幣ヲ受取り之ヲ発行シ又其息ヲ得テ八重ニ其利ヲ網スルモノナリ仮令ハ募リ金百万円ノ銀行ナレハ六十万円ヲ大蔵省ニ納メ公債証書ヲ受取り尅ケ年三万六千円ノ利ヲ得又六十万円ノ銀行紙幣ヲ受取り之ヲ発行シ其利月尅歩五朱ト見做シテ九千円一ケ年十万八千円ナリ之ニ公債証書ノ利息三万六千円ヲ加テ通計十四万四千円ノ利ヲ得之ヲ元金六十万円ニ配スレハ年ニ割四歩ニテ月ニ歩ノ利ニ当リ分外ノ利息ナリ之レ元金ハ六十万円ナレトモ銀行紙幣ト公債証書トニタ面ニ相成百二十万円ノ働ヲナセルカ故ナリ併ナカラ募金百万円ノ内四十万円ハ引換準備ニ積立置ナレハコノ四十万円ハ働カザル故年利十四万四千円ヲ元金百万円ニ配シ月一步二朱ニ当リ大金ニハ過分ノ利ナリ其外他ヨリ預金モ有ベキナレトモ且亦預リ高ノ内少クトモニ割五歩ハ臨時返却ノ用意トメ備置ヘキ規則ナレハ仮令ヒ月一步利ニ借リ入レー歩五朱ニ貸附タリトモ其外ハ一歩一朱ニ五ノ利ニ当レリ一朱ニ五ノ益ニテ手数料ニモ足ラザルヘシ併シ備置クニ割五歩ノ内預リ高ノ一割ハ公債証書ニテモ不苦トアレハ通貨ハ預リ高ノ一割五分備置トシテ計算スレハ月一步ニ朱七五ニ当リ其内社益ト成ルハ僅カニ朱余ナリサスレハ預リ金ハ格別ノ益ナカルヘキ乎其外社費雑用役員月給等多分ニ相懸ルヘク且備金ノ外多少淀ミ金モナクテハ相成マシク是等巨細ハ論スル迄モナク既ニ去明治六年中各銀行決算書ニ詳ニシテ之ヲ閱スルニ惣様ノ利益大凡年六歩利ヨリ八歩利ノ間タニアリ年六歩利ナレハ月五朱ニ当レリ右ノ如ク月五朱以上ノ利ニカカレハ大金ニハ相当ノ利ニシテ最も銀行ハ取建ツベク入社スベキノ要挙トモ云ヘシ

以上は、彼の「国立銀行ノ利害」の最初の部分であり、資金関係から、その機構と組織を述べ、資本金百万円の銀行では年利十四万四千円即ち月一步二朱の利益金が得られ「大金ニハ過分ノ利ナリ」として、国立銀行は企業として有利な経営が期待されると結論する。事実、明治六年の銀行決算書によれば、年六歩ないし八歩の純益をあけていることを指摘、「銀行ハ取建ツベク、入社スベキ」存在であるとして、国立銀行の創設による有利性を強調している。

次は引続いて、国立銀行の経営上の短所を指摘する。銀行紙幣の兌換について二つの問題点をあげ、国立銀行条例の規定における正貨引換を批判する。まず第一は、銀行の紙幣発行につき三の二の正貨準備、さらに残りの三分の一の引換準備を規定する点である。

然ルニ銀行紙幣引換方ニ至テ兩条ノ難件アリ其一条ハ

国立銀行条例第六条

第十五節故銀行ニテ其紙幣発行ノ際ニ於テハ云云

但紙幣ノ皆高ヲ発行シテ後其引換多シテ三分二ノ正金ニテ引換方差支ユル事アレハ其三分一ハ別ニ他ノ正金ヲ加ヘテ之ヲ引換聊モ之ヲ拒ミ又ハ之ヲ怠ルヘカラス

此ノ但書ノ一条ニ至テ窮セサルヲ得ス元來紙幣高ノ三分二ノ正金ヲ以テ紙幣全額ノ引換準備トシ引換方差支ユル事アレバ其三分一ハ別ニ他ノ正金ヲ加ヘテ之ヲ引換聊モ之ヲ拒ミ又ハ之ヲ怠ルヘカラストアルハ甚タ難事ニテ其銀行盛立ノ日ニ在テハ敢テ多ク引換ニモ向フマジク聊カ憂ヘキノ萌ナシト雖トモ一旦事故アッテ一時引換ニ向ヒ準備三分ノ二正金引換ノ際ニ當ッテ残り三分一ノ引換方差支サルノ処置アルヘキヤ銀行紙幣發行高六十万円ノ方ニ準備正金四十万円ヲ以テ之ヲ引換残り二十万円ノ正金何レニ可有之ヤ其銀行事故アルノ聞ヘ有之カ何レ子細ナクテハ一時引換ニ向フ事モ有之マシク純粹ニ之ヲ言ヘハ百万円ノ内五十万円ハ正金ニテ備ヘ置五十万円ヲ太蔵省エ納メ公債証書暨銀行紙幣ヲ受取之ヲ發行スル乎サナクテハ準備金ニテ三分ノ二引換タル残り三分一引換方差支^{銀行紙幣}タラハ公債証書返納太蔵省ヨリ正金相渡ル事ニ有度義ナリ併シ銀行ノ大挙ヲナス程ノ社中株主準備三分ノ一正金備方ハ其任タルヘシトノ義ナル乎依テ反覆顧慮シテ之ヲ言ヘハ銀行紙幣受取高三分一ヲ残シ置キ三分二ヲ發行スレハ引換方ニ於テハ差支ナシト雖モ其利益少ナシ寧ロ其利少クトモ引換方究スルナキノ万々優レルニハ如カザルヘシ仮令ハ

六十万円 公債証書全額

此利三万六千円年六歩月五朱ナリ

紙幣高六十万円ノ内

四十万円 銀行紙幣發行高

此利七万二千元

年一割八歩月一步五朱也

利息合 拾万八千円

之ヲ元金百万円ニ配スレハ月九朱ニ當レリ之レハ銀行紙幣月一步五朱ニ貸付ルノ計算ナリ一步五朱ニ廻ラサレハ猶低利ニ相当ル方今各銀行紙幣全額發行ニテスヲ月五六朱ノ利益ニ當レハ紙幣三分ノ一残シ置三分ノ二發行ニテハ其利益愈少カルヘク月利三四朱ヨリハ上ラサルヘキ乎カルク薄利ニテハ營業ノ詮ナカルヘシ

条例

第一節

第十八条

第三節

第十九条第五節

ここにおいては、銀行経営の利益の低さに注目する。即ち月三四朱、年利に直せば三步六朱か、四歩八朱に當るにすぎない。これは「紙幣三分ノ一残シ置三分ノ二發行」という国立銀行の紙幣發行制度に由来するものであり、こうして發行された銀行紙幣が月一步五朱にて貸付けられ、年利一割八歩という高い利益をあげたと仮定しての計算である。この場合でも資本金に対しては月九朱になるという利廻り計算である。ところが現実の銀行紙幣發行の状況では、月五六朱即ち年利六分な

いし七分二朱であり、資本金の三分の二が発行されるのであり、従って銀行経営の面からみれば「其利益愈、少カルヘク月利三四朱」ぐらいが見込まれるにすぎないとして、「薄利」になる点を歎くのである。

さらに第二の難点が認められる。

此条正金暨官省
ノ紙幣取り交セ
引換ル事ニナレ
ハ此患ナシ

且紙幣三分ノ二発行ニ於テモ又猶此ニ一條ノ難件アリ銀行紙幣引換方ハ都テ正金ヲ以テ引換イタスヘキ規則ニ付正金流通ノ時ニ於テハ聊カ滞ナキカ如シト雖モ一時正金払底ニナリタルカ少シニテモ正楮開キヲ生スルノ日ニ至ツテハ悉ク引換ニ向フヘク其引換タル紙幣重テ発行スレハ再ヒ引換ニ向ヒ随テ発行シ随テ引換其引換ノ度々開キノ歩合ハ其銀行ノ損失トナルナレハ紙幣ハ受取ナカラ発行ナシカタキモノト云ヘシ此ニ於テ銀行ノ取建ツヘカラス入社スヘカラサルヲ知ル然レハ百万円ノ募金ニテ六十万円ノ公債証書年六歩ノ利息ヲ得其内雑用月給等引去リ残リノ利益而已ナルヘシ此レニテモ尙銀行取建ツヘク入社スヘシト言フヤ否ヤ

ここでは銀行紙幣についての正貨引換の問題を提起している。紙幣は「正金ヲ以テ引換イタスヘキ規則」であり、「正金払底ニナル」ことから起る通貨不安として「少シニテモ正楮開キヲ生スル」ことを恐れる。正貨と紙幣との間の価値の相違からくる紙幣の乱発、そして紙幣価値の下落があれば、そのとき銀行の紙幣発行は、事実上「発行ナシカタキモノト云ヘシ」との状況にある。国立銀行は資本金の六割までの発行紙幣を発行することができても、紙幣を発行すれば、直ちに兌換が要求され、結局失敗に終ることになるを察知したのであり、政府の初めの予想になして開業したのは、四行にとどまったのも此の理由によるのであった。こうしたわけで、「青淵回顧録」に述べるように、明治五・六年頃までは金紙に開きを見なかったのが、明治七年に入っては政府の不換紙幣濫発の流毒漸く市場に現われ、輸入増進につれて正貨流出亦甚だしく、八年の六月には政府紙幣は金貨一千円につき一七、八円の打歩を生ずるに到った。国立銀行は其の為に銀行紙幣を発行すれば従って取付に会い、横浜第二国立銀行の如きはトウトウ一枚の紙幣すら発行する事が出来なかった」①という状態であった。実際において銀行紙幣流通高は明治七年から急激に減少していった。「第一銀行史」によっても、明治八年には春頃より頻に金貨の取付が多くして、銀行は余儀なく自己で其紙幣を引上げ」②ざるをえないのであった。こうして銀行紙幣実際流通高は、明治七年六月末に四行合計で一三五万七〇〇〇円に達したのを頂点にして同年十二月末には八〇万三〇〇〇円に減じ、翌年六月末に三八万一〇〇〇円、十二月末には二三万四〇〇〇円に、そして九年六月末には六万二〇〇〇円と漸減した③。この点については、後述するように渋沢栄一も同意見を述べている。

なお引続いて銀行の破産について述べる。

条例第十八条
第十二節

併シナカラ自余ノ諸会社ノ如キ破散スレハ社中株金ノ損失而已ナラス其余ニ損失アレハ社中ヨリ償却スヘキ訳ナレハ其損失予メ計ルヘカラサレトモ国立銀行

会社ノ責任ニ合
名差全無名ノ別
アリ

ニ於テハ「仮令其銀行ニ何様ノ損失アルトモ其株高ヲ損失スルヨリ外ハ別ニ其
分等ノ賦当ハ受ケサルヘシ」トアレハ仮令破散スルトモ株金丈ケノ損失ニテ其
余ニ弁償却ノ憂ナケレハ他ノ諸会社ノ如キ大損失ヲ醸成シ身代処分ヲ期スルノ
大害アルニ入社スルヨリハ遙カニ此ニシク優サルヘキ乎

小幡は、国立銀行の破産については必ずしも悲観的でない。その影響の経済、社会に及ぼす広さ深さを十分に考慮していない。国立銀行も経営の困難性を指摘しながらもその破産について深刻にとりあげていない。明治七年秋に小野組と島田組が相ついで破産し金融界、経済界は混乱した。しかし銀行の破産については政府もその影響の重大なのを憂慮していて、政府は「銀行ヲシテ破産セシムル如キ事アレハ独リ目下ノ金融ニ影響ヲ及ホスノミナラス将来ノ銀行信用ニ関スル事少ナカラ」④ずとした。実に銀行の設立によって金融の道を開き、為替の便を進め、もって商業活動を活発せしめ、その社会的機能が果されるのであり、その点を考慮すべきである。

以上で小幡の「国立銀行ノ利害」の項の叙述を終るが、本書は更に次の節の諸項目についても論及を続ける。

- 1、小貫修一郎編、青淵回顧録、上巻三九〇頁、および東畑精一、高橋泰蔵監修、日本の銀行制度立史——日本金融市場発達史Ⅱ、第一篇銀行条例の精神と普通銀行の歩み（後藤新一）一二頁
- 2、第一銀行史（上巻）九五九頁
- 3、明治財政史、第一三巻二九七頁
- 4、貨政要考（明治前期財政経済史料集成、第一三巻四四一頁）

五、小幡「国立銀行ノ利害」続篇一

イ、物価騰貴論 ロ、正貨および紙幣論。

付録 福沢諭吉の物価上昇論との比較

小幡和平の原本では、引続いて項目として「諸品物価騰貴」および「正貨楮幣ノ開差」の二篇が叙述されている。ここでは一応は続編として物価論、正貨および紙幣論という現代の用語をもってこれを示すこととする。この二篇は直接国立銀行の利害に関係するのではなく、関連論文であるといえる。

イ、物価騰貴論

諸品物価ノ騰貴

物価ノ昂低スル所以ハ人民需用ノ多寡ニ関スルコトハ固ヨリ言フ俟タサレトモ其昂低スル原由天下ノ形勢ニ原ツクアリ稔穀ノ豊凶ヨリ生スルアリ物品ノ多寡ヨリ来ルアル融通ノ緩急ヨリ醸スアリ貨幣ノ品位ヨリ因スルアリ争戦アレハ兵器戎具騰貴シ凶歉ナレハ米穀食品沸騰スルカ如キ是レ天下ノ形勢ニ原ツクモノナリ稔穀豊饒ナレハ米価下落シ凶年飢歳ニハ米価騰貴スルカ如キ是レ稔穀ノ豊凶ヨリ生スルモノナリ輸出入ノ多寡国産ノ増減ニヨリ物価ノ昂低スルカ如キ是レ物品ノ多

寡ヨリ来ルモノナリ金融寛ニシテ物価低ラス金融急ニシテ物価下落ス是レ融通ノ寛急ヨリ醸ス所ナリ此四件ハ則一時ノ高低ヲ為シ商売毎ニ利ヲ射ルノ機会ナレトモ忽チ形ニ現ハレ見難カラスシテ其害ヤ最モ小ナリ外ニ一件貨幣ノ品位ヨリ因スル物価ノ高低ハ甚タ見易カラサル所ニシテ其害ヤ殊ニ大ナリ駸々然トシテ不知々々竟ニ大沸騰ニ至ルータヒ騰貴スレハ再ヒ復シカタシ之ヲ往時ニ徴スルニ（享保年間貨幣品位大変革アリ事繁長ナレハ附録ニ出ス）元文以来文化文政ノ頃ニ至ツテ物価甚タ低下セリ之レ其頃打続キ年穀豊饒タリト雖トモ第一貨幣ノ品位ヨリ因スル事瞭然タリ其所以ハ元文年間金銀改造後百年近ク改貨ナク金銀稍減少ノ姿ニテ夫カタメ物価漸々低下セリ然ルニ文政年間ヨリ追々貨幣新鑄改造天保安政続テ止マス文久慶応ノ末ニ至リ旧幕府政權立タサルノ際ニアタツテ擬造贋金諸国ニ多ク成リ貨幣ノ種類品位区々ニシテ物価ノ紛擾言フハカリナク御一新ニ至ツテ始メテ貨幣ノ品位爰ニ定マルト雖トモ未曾有ノ楮幣御発行ニ相成リ亦は一層物価ノ沸騰ヲ醸成セリ方今ノ物価ヲ以テ天保頃ノ物価ニ較スルニ大凡四倍五倍六倍（此ニ四倍五倍ト云ハート四五トノコトナリ）ノ間ニ位セリ

彼においては、物価の騰貴、下落は人民需用の多少によるとしながらも、この高低にはそれぞれ原因があるとして、次の五つの要因を分析する。一は天下の形勢例えば戦争、二は農産物の豊凶、三は輸出入の増減による国内物資の多少、四は金融の緩急、そして五貨幣の品位即ち改鑄等をあげる。これらのうち一から四までの原因は一時的現象になってあらわれ、商人の利益獲得の機会をなす、しかし第五の要因は「見易カラサル所ニシテソノ害殊ニ大ナリ」として強調し、一たび騰貴すれば再び復し難き持続性を帯びるとして歴史的に貨幣改鑄の事実関係を実証しようとしている。彼の見解は一つの見識であり、優れている。明治10年の福沢諭吉著「民間経済録」にも「物価高下の事」①が論じられているが、後ほどこれと対比して考察したい。

物ニ就テ二之ヲ言ヘハ（此ニ物価ノ比較ニ天保頃ト云フハ敢テ天保年中ニ限ルニアラス弘化嘉永モ亦其内ナリ）米老石代価（天保頃）金壹両内外（方今）通貨五円内外（大凡五倍ニアタレリ）炭目形拾貫目代価（天保頃）銀五匁内外（方今）通貨三十銭内外（大凡四倍余ニアタレリ）大工作料壹人分（天保頃）銀貳匁五分（但六八金方今）通貨十五銭（大凡四倍余ニ当レリ但方今拾五銭ハ旧藩札ニテ三拾目ナレハ貳匁五分ノ十二倍ニ当レリ六十八匁ノ金価貳百目ニ至レハ大凡三倍ニ近シ之レ藩札ノ低落ヨリ生シタル損失ナリ然ル上ヘニ尙又通貨ノ低下ヨリ四倍余ノ損失ヲ受ケ三四ノ十二倍ニ至レルナリ然ルニ此ノ四倍余ト云フノ精算ハ六十八匁金ノ貳匁五分ハ方今ニ此較シテ新貨三銭六厘八毛ニ当レハ十五銭ハ即チ四倍〇七余ニ当ルナリ）

湯銭一人分（天保頃）銭六文（但シ六八金百目ニ付銭九貫二百文替方今）通貨五厘（大凡五倍余ニ当レリ）

客アリ曰ク方今物価非常ニ騰貴スト世人拳テ之ヲ言ヘトモ余ハ更ニ之ヲ信セス然ル所以ハ天保ノ頃湯銭六文ナリ然ルニ方今銅銭四箇五箇ヲ以テ入浴ス然レハ往年ヨリ壹貳文ノ低下ナリ豈ニ之ヲ騰貴スト言フヘケンヤト主人答テ曰ク君不知ヤ銅銭十倍（藩札ニテハ二十倍）ニ価スルヲ。サレハ銅銭五箇ハ即今五厘ナリニシテ往年ノ六文ニ比較スレハ八倍余ニ当レリ然ルニ之ヲ騰貴セサル

ト言フヲ得ンヤ則湯銭ハ往年ノ八倍ニ位セリト言フヘシト傍人之ヲ駁メ曰ク両説共ニ謂レアリト雖トモ未タ比較ノ正当ヲ得サルナリ客ノ意ハ物価ノ騰貴シタルニテハナク貨幣ノ低下シタルナリトノ説ナルヘケレトモ未タ尽ササル所アリ主人ノ説ハ銅銭十倍ニ価スルヲ以テ之ヲ比較セント欲ス是亦比較粗ニシテ正当ヲ得サルナリ往年ノ銭六文ハ銅銭而已ニアラス且方今天下ノ通貨皆銅銭ナラハ十倍ニ比較シ得ヘケレトモ銅銭アリ銑銭アリ金貨アリ銀貨アリ紙幣アリ各々価位区々ニシテ殊ニ銅貨等定位ノ貨幣ハ本位ノ金貨ヲ補助スル分貨ニシテ端タノ取引ニ遣フ為メナレハ銅銭ノ価位ヲ以テ物価ヲ比較シ得ヘキ品ニアラス都テ定位ノ貨幣ハ本位ノ金貨ヲ目当トシテ通換スルモノナレハ物価ノ比較ハ本位ノ金貨ニ基クヘキコトナリ依テ今ノ湯銭ノ比較ヲ言ヘハ

天保頃湯銭六文（但銭相場百目ニ付九貫二百文替金老兩ニ付六十八匁替）金一兩代銭六貫二百六十六文ニテハ銭湯千四拾三人入浴セリ

方今通貨五厘ナリ金一円ニテハ二百人入浴ス。サレハ天保頃ノ五倍ニ割一分五ニ当レリト云フヘシ

この節では、天保の頃と比較して現在（明治七年ごろ）の米、炭、大工賃料、湯銭の高騰を例示している。初めの節では専ら価格変動の要因を述べたが、ここでは特に第五の要因に視点を置いて最も日常生活に関係あると見られるこの四商品をあげて物価の一般的騰貴の事実関係を明らかにしようとしている。その際に注意されるのは、単に貨幣の換算によって両時期の価格を比較するのではなくて、貨幣の購買力を考慮して基準にする。例えば天保ごろの湯銭六文については当時の金一兩によって入浴しうる人数と明治七年ないし八年ごろの湯銭五厘について金一円によって入浴しうる人数を比較し、その倍数を計算している。即ち前者の一、〇四三人と後者の二〇〇人とを比較して五、二一五倍とした。単なる計算では天保ごろの六文は現在の五十文であり八倍余に当るが、この方法をとらない。

右ノ如クナレハ方今ノ物価天保頃ニ較スレハ四倍五倍余ニ当レリト云ヘシ如此ク大沸騰ニ至レルハ年穀ノ豊凶ヨリ生スルニ非ス物品ノ多寡ヨリ来レルニ非ス融通ノ緩急ヨリ醸スニ非ス是則貨幣ノ品位低下スルニ因スルモノナリ貨幣ノ品位低下ノ証ハ既ニ安政ノ末外国金貨ノ比較ニテ保字金一兩ヲ以テ新小判三兩二分余ノ通用ニ至レリ是レ貨幣ノ品位三分ノ一ニ低下スト云ヘシ其余古金ノ価位準シテ昂レリ是レ物価三倍スルノ徴ナリ併シ全国ノ貨幣金貨而已ニテハ無之此時銀貨ハ多分ノ替リ無ケレハ之ヲ以テ全ク物価三倍ストモ言難ケレトモ何レ其左右ニハ出テサルヘシ其後貨幣ノ品位一変革アリテ方今ニ至リ新貨製造アリテ古金銀ノ価位爰ニ定マリ保字金一兩ハ新貨四円四十五銭余天保一分銀一兩ハ新貨一円四十銭銅銭ハ老厘等ノ通用ニ相成リ何レモ数倍ニ価セリ親シク貨幣ノ全額ヲ知ラサレハ平均何倍ト云フノ証ヲ得サレトモ幣位大凡四分ノ一ニ低下セリサレハ物価ハ四倍スト云ッテ可ナラン乎是レハ之レ保字金ト新貨幣トノ品位ヲ以テ之ヲ論スレハ一目瞭然如此ク隠スコトナク蔽フコトナク權衡ノ懸ツテ輕重逃ルル処ナキカ如シ

このようにして物価の長期波動として天保、明治を比較して、その騰貴傾向の事実を把握してそ

の原因を貨幣の品位低下即ち改鑄に求める。幕末には旧一両が新小判三兩二分に通用し、さらに明治に入り、新貨四円四十五銭通用になった。こうして貨幣価値は大凡四分の一に低下し、それだけ物価は上昇した。

これと共に物価上昇の原因として貨幣数量の増大、即ち紙幣の発行の増加をあげて、いわゆる貨幣数量説を展開している。そして物価上昇の恐るべき例をあげ、鴻池や加嶋屋等の金貸し業の破産を示す。天保ごろ金百両をもって米百石を買い得ても、現在は金百円を以て米二十石のみしか買えない事情であり、次のように述べる。

又之ニ加フルニ貨幣ノ多寡ヲ以テ之ヲ論スレハ右貨幣品位ノ外別ニ一層夥多ノ楮幣ヲ製造発行アリ其数亦計ルヘカラスト雖トモ先年金札製造廃止器械破壊ノ令アリシ時既ニ三千五百両発行ノ由ナリ其後新紙幣製造ノ額数暨寡少ナカラモ国立銀行紙幣等惣様通計全数計リ知ルヘカラスト雖モ既ニ貨幣ノ品位ニ於テ物価四倍ノ騰貴ヲ徴セリ而シテ又之ニ加フルニ夥多ノ楮幣ヲ以テスルヤ此末物価ノ騰貴必ス五六倍ニ止マラサルヘシ併シナカラ物価騰貴スト雖モ徑チニ騰貴スル而已ノモノニハアラス騰貴ノ中ニモ低落スルアリ低下ノ中ニモ高低アリ譬ハ上リ峠ノ内ニ下リ坂アルカ如シ時々ノ昂低ハ毎ニアルヘキ義ナリ此頃聞ク還禄ノ資金之ヲ米利堅ニ借り金壹億二百万弗（此ノ一億ハ以テ千万ノ為レ億ノ一億ナルヘシ万々ヲ為レ億ノ億ニテハ莫太ノ多数且一億〇二百万弗ト云ヘシカタ々々千万ヲ億ト為ルノ一億ナルヘシ）吉田大蔵少輔齋ラシ来レリト未タ然ルヤ否ヤヲ知ラサレトモ若シ信ナラハ正貨ニテ増加シ若シ不信ナラハ還禄ノ資金ハ紙幣造発ヨリ外ナカルヘシ何レニイタセ通貨増殖スレハ物価騰貴スルノ原因ナレハ猶此末物価ノ騰貴爰ニ顯然タリ之ニ依テ之ヲ觀レハ国立銀行等貸金ヲ以テ營業トスルモノハ勤勞ナフシテ息ヲ取り豊凶ニモ不レ關其利ヲ得歴然タル家禄ノ如シト雖モ一旦貨幣ノ品位低下スル時ニ當ッテハ屢々然トシテ終ニ其元金ノ自ツカラ減シタルノ所以ヲ知ラス仮令ハ天保年間ニ金百両貸付置キ年々其利息ヲ取得テ聊カ損失ナキカ如シト雖モ天保頃ハ金百両ヲ以テ米百石ヲ買得タリ方今金百円ヲ以テ米二拾石ナラテ買ハレ得スサレハ金高ハ些減少モセス依然トシテ今百円ナレトモ之レ身代五ヶ一ニ減少シタルニテ百兩ノ元金二十円ニナリタルト同事ナリ質屋渡世ノ者アリ最前ハ資金千兩ヲ以テ利息ハ月一歩五朱ナリ永ク營業ヲ為セリ然ルニ方今其家其庫其人ヲ以テ利息ハ月二歩ニ相増タレトモ三千円ノ資金ナクテハ昔日ノ如キ營業相成カタシト是亦四倍ノ証ナリ近年鴻池加嶋屋等ノ如キ金貸シ渡世ノ者皆身代潰レタルハ御一新ノ際諸藩ノ借財公債ニ成タル故モアレトモ全ク貨幣ノ品低ヨリ潰レタルモノナリ元來貸金ヲ以テ營業ヲナスモノ貨幣ノ品位低上ノ變動ニテ身代減セサルヲ得サルノ証跡此ニ於テ顯然タリ

以上が小幡の「諸品物価ノ騰貴」の全貌である。ここでは物価上昇の原因を追求しての、五つの要因をあげ、そのうち第五の貨幣品位に注目する。そして例を天保のころと明治の両時代を主として比較し、その貨幣購買力の変化をのべる。もっとも短期の波動にも注目するが、恐るべき価格変動は、主として貨幣品位の面からとらえようとする。しかし幕末の物価上昇には、農産物の豊凶が原因をなす場合も少なくないこと、また安政六年に始まる開港以来、大量の輸出、ドル銀の氾濫と

相まって物価騰貴し、十年間に十倍もの上昇をみたことのある事を忘れてはならないと思う。

しかし伊牟田敏夫氏は②近世の物価史研究の課題について貨幣的要因の重要性を考慮に入れるべきことを述べるが、小幡のこの論文は視点は必ずしも同一ではないとしても、貨幣品位から追求する点は注意されていいといえる。

口、正貨および紙幣論

正貨楮幣ノ開差

前条貨幣ノ夥多ナルヨリ此末物価ノ騰貴スヘキ微效ヲ緒言セリト雖モ爰ニ斟酌スヘキノ一事件アリ方今ノ物価ハ外国貨幣ノ品位輸入物品ノ平均ヨリ今日ノ価値ヲナセルモノナレハ物価大ニ騰貴スレハ頻リニ物品多ク輸入スルヲ萌セリサスレハ是カ為メ物価昂ルコトヲ得サルノ形アリ然リト雖モ紙幣往々夥多ニナレハ竟ニ正貨楮幣ノ開キヲ生セサルヲ得ス一旦開キヲ生スルニ至ッテハ五錢ニテ止ルヘクヤ十錢ニテ止ムヘキヤ之レ限リナキノ開差ニ至ラサル事ナシトモ云ヘカラス既ニ米利堅合衆國ニ於テ千八百六十一年マテハ正貨楮幣ノ開差ナカリシ処南北戦争ノ際ニアタッテ忽チ開キヲ生セリ

千八百六十二年

正貨百弗ニ付 楮幣百十四弗

千八百六十三年

同 百弗ニ付 同百四十四弗

千八百六十四年

同 百弗ニ付 同貳百四弗

頃日横浜相場洋紙一弗ニ付大札子六十三匁同小札子六十二匁八分同円金六十一匁八分右ヲ算計スレハ円金百円ニ付太札子百一円九十四錢一厘七毛ニ相当ルナリ

右ノ如ク開明ノ合衆國ニ於テスラ一時分外ノ開差ヲ生シ纔カ三年ノ間ニ楮幣半価ノ内ニ低レリ即今我カ景況ニ於テ聊カ正楮開差ノ萌シナキカ如シト雖モ（頃日横浜ニ於テノ洋紙相場ヲ比較スレハ既二百円ニ付正楮ノ開差大凡二円ニ當レリ）幾年ノ後カ終ニ開キヲ生スヘキ事ハ識者ヲ俟タスシテ判然タリ一旦事故アルニ至ッテハ忽チ差ヒ忽チ開キ米ノ鑑ミ遠カラサルヘシ既ニ我藩札六十八匁ヨリ一旦開キヲ生シ終ニ貳百円目ノ極ニ至レリ最モ政府ニ於テ注意尽力最第一ノ要務タルヘケレトモ変ニ処シテハ如何トモ所置ナカルヘシ正楮開キヲ生スレハ則諸品物価尽ク騰貴セサルハナク此ニ於テ亦身代ヲ減セサルモノナカルヘシサレハ楮幣発行ノ時ニ処シテハ予メ其心得ナクンハ有ルヘカラス加之外国貿易上ニ於テ輸出輸入ノ金額ヲ比較スルニ輸入品代価大凡千万円ナレハ輸出品代価大凡五百万円ニ當レリサスレハ跡五百万円ハ我カ正貨幣輸出ノ運ヒニ相成ヘク其
余外国負債幾莫アリヤ且還祿ノ資金外債実説タラハ夫レ是レ許多ノ返却年々輸出金アルヘシ尤外国人居留ノ雜費我ニ止マルヘケレトモ亦我カ公使留学生等各國ニ於テ多少費ス処アリ其点檢先ツ同様ニテ過不足ナシト見做シ年々正貨五百万円（但少分ニハカリタルナリ）輸出ニ相成リテハ數年間ニ我正貨方サニ尽キ

ントス此ニ於テ政府頻リニ鉱山ヲ開キ物産ヲ殖シ万国ニ併立セント欲ス鉱山物産増殖ストモ是レ俄ニ輸ス処ヲ償フヘカラス如此ク正貨輸出シ減少スレハ亦是正楮開キヲ生スルノ基ナリ貸金営業トスル者ハ正楮開キヲ生スルニ至ッテ其損失免レサルヘシ

物価上昇の問題を、銀行経営の立場を中心にして考えて、その恐るべき影響を指摘したこの著者は、次いで正貨と紙幣の価値の開きについて述べる。例をアメリカの南北戦争における両者の差をあげ、「三年ノ間ニ楮幣半価ノ内ニ低レリ」とし、やがてわが国でも発生する事を恐れ、それによって「諸品物価尽ク騰貴セサルハナク」と警告を発している。紙幣発行にはそれに必要な準備をすべきであり、また輸入が一千万円にして輸出五百円である場合の正貨流出即ち輸出入のアンバランスにも対策を怠るべきでないと論及している。金銀鉱の開発が必要になるが、事態の好転に間に合わない場合「貸金営業トスル者」の損失は避けられないと結び、貨幣の側から問題を掘り下げる。こうして「正楮開キヲ生スル」事の処置についての政策を後に述べる。

付録 福沢諭吉の物価上昇論との比較

その前に、この小幡の物価騰貴論について、福沢諭吉の考えと対比してみたい。同時代の人物であるが、両者のあいだに直接の関係はみられないようである。明治期の偉大な経済学者である福沢諭吉と対比することは問題であるが、小幡の考え方を位置づけることは許されるであろう。

元来、福沢は「近代人物山脈中に屹立する一雄峰であり」③その龐大で多面的な全容の中から経済の物価論だけを正確に把握することは容易な業ではない④。福沢が愛読し慶応義塾で講義したウエーランドの「経済論」⑤やその邦訳にあたる福地桜痴「官版会社弁」(明治3年成、同4年大蔵省から刊行)や何礼之「世渡りの杖」(明治5—7年刊)正統篇(ともにウエーランドの経済論、第二部交換論の中の西洋の銀行制度の性質について平易に訳出された書物)に接していたか、どうかは明らかでない。小幡文庫には所蔵されていない。福沢のこの方面の著述は、「民間経済録」(明治10年11月19日記となっている)とくに第七章「物価高下の事」⑤である。次にその要点のみを記述する。

物価高下の事

物価とは唯品物を売買する価のみに限らず、職人の賃金も奉公人の給金も、官員の月給も教師の給料も、家賃も地代も損料も席料も、皆物価の種類として視る可し……物の価は年々に異なり月々に異なり、日々夜々片時も定ることなし。之を物価の高下と云ふ。即ち相場の変化なり。今この変化の原因を尋るに、品物潤沢すれば物価下り、品物払底なれば物価上る。之を第一則とす。……毎年横浜にて蠶卵紙輸出に就て悶着多きも、其品物潤沢に過ぎて当惑するものなり……

品物の潤沢すると払底なるとに拘はらず、世間の人々に之を所望する者の多きと少なきとに由て物価の高下することあり。之を第二則とす。祭礼の日に魚鰯の価高値と為り、大火の後に材木の価を引上げ……

為替の相場も亦この道理なり、譬へば商売取引の様様に由て、東京より大阪へ金を送らんと所

望する者多ければ東京の為替高く、之に反すれば大阪の為替高し。又横浜にて輸出品多ければ洋銀の相場下落するを常とす。品物の代を洋銀にて受取り、其洋銀は内国に通ぜざるを以て之を日本の通貨に両替へせんことを所望する者多きが故に、斯く下落するなり……

空米相場する悪者が大金を用意して勝利を得ることあり。譬へば、相場の会所にて無暗に米を買へば、世間に行はるる、実の米価に拘はらず、会所にては一時米を所望する者多き姿にして、之が為に相場を引上げざるを得ず。売方の者もよく其策を推量して承知のことなれば、亦世間の相場に拘はらずして無暗に売込み、互に相争ふて一方は相場を買上げんとし、一方は之を売下げんとし……

右の如く世間に所望多ければ其事も繁昌し其人も榮ることたれども、今の世界に於て必ずしも有益のものゝみ繁榮するに非ず。人の所望は甚だ多端にして其好む所千種万状なり。角力もあり、芝居もあり、見世物もあり、輕業もあり、甚しきは蛇使ひを以て渡世にする者もある……

藥を嘗め、禍を免かれんとして呪する者あり。天下の売藥は悉皆塵埃に異ならず、埃を嘗めて病を癒す可きや。……章末に於て尙云ふ可きことあり。一国の通用貨幣と商売品とは釣合あるものにて、其釣合に従て、品物多ければ品物の価下落し、貨幣多ければ貨幣の価下落するを經濟の通法とす。故に諸色高直と云ふは一方の言葉にして事の実を証するに足らず。貨幣に対して云えば、諸色の高直に為りたるに非ず、貨幣の下直に為りたることなり。今日の米は高直にして一升六錢なり。之を古の百に三升の米に比すれば二十倍なれども、古の人足も一日十八錢の賃錢を以て亦三升の米を買ふ可し……

此後若し紙幣の發行益多く銀行の数も次第に増すことあらば、通用貨幣（即ち紙幣銀行札）の多さと商売品の多さと其釣合を失ひ、貨幣の価は下落して品物の価は高くなる可し。されども其品物の高くなるは紙に対して高くなるのみにして、金に対して高くなるに非ざるが故に、外国より金を輸入すれば其実は安く之に交易することと為り、詰る所は紙幣を握りて次第々々に其下げ喰ひし者の損亡たる可きのみ。

福沢が物価上昇の原因としてあげるのは小幡と同様に、以上のように五つの成因を求めている。その基本的条件は需給原理であり、それを物価変動の「第一則」とする。五つの成因とは、一、商品の潤沢と払底における供給の側、二、「所望」する者の多少に係る需要の側、三、為替相場、空米相場の機能、四、有益ならざるものとする娯樂、たとえば芝居、輕業、角力など、また売藥類のサービス業、そして五、通貨と商品との流通における数量的不均衡とくに「紙幣銀行札」の發行をあげる。

小幡も前記のように五つの成因をあげ、一、天下の形勢とくに戦争、二、農産物の豊凶など需給の変動、三、輸出入の増減、四、金融市場の緩急、五、貨幣の品位をあげて、当時の物価上昇についての把握に対する実務論を展開する。当時の經濟論はいずれも実践的體驗的敘述に基づくものであり、ただ小幡においては物価変動を実証的に長期的、歴史的に觀察するのに対し、福沢は現象面の分析を主としていて、原理的考察を主としているという立場の相違があるにとどまる。双方とも事実関係を着実に理解し把握しようとして敘述しているのである。

- 1、福沢諭吉、「民間経済録」第七章物価高下の事（福沢諭吉全集、第四巻、三二三——三二八頁）
- 2、伊牟田敏夫「明治維新史研究講座」第三巻
- 3、伊藤正雄、福沢諭吉の研究、序、一頁（甲南大学紀要文学編Ⅰ）一九六六年
- 4、たとえば、太田正孝、町人諭吉、九頁
- 5、福沢諭吉「明治12年慶応義塾新年発会之記（全集四、五六四頁）
- 6、福沢諭吉全集、第四巻、「民間経済録」は衆知のように十章からなっていて、第一章「物の価の事」から始まり、第七章が「物価高下の事」に当てられている。しかしこの間にも第四章「正直の事」、第五章「勉強の事」なども、この民間経済録の中に納められている。なお「民間経済録二篇」(同書三四一—三八五頁)はその続篇であり、明治13年6月22日、福沢諭吉記」となっている。第三章「銀行の事」(三五九—三六二頁)が載っているが、その概念を記述するに止まっている。即ち銀行の必要性、機能、職分、組織等について概念的に簡単に説明するに止まっており、筆者はここで取りあげないこととした。

六、小幡「国立銀行ノ利害」続篇—動産、不動産論

以上のように、貨幣価値は変動が激しく、銀行経営にとって重大な問題である。ところで銀行経営の健全化として資産の運用も吟味されなければならない。次に問題にするのは、資産を四分して、その一を正貨として府庫に保管して非常に備えると共に、その一は貸付金の抵当として動産、不動産に、また一は有価証券にする場合の問題を次に取りあげる。とくに動産、不動産の抵当価値について吟味する。

動産不動産の得失

前条貨幣ノ変換ニ依テ身代減却ノ筋ハ既ニ之ヲ論セリ殊ニ楮幣発行ノ時ニ在ツテハ畢竟正楮開キヲ生スルノ期アルヲ徹底忘ルヘカラス然ラハ則之ニ処スルノ道如何ンシテ可ナランヤ正貨ヲシテ府庫ニ充シメテ可ナラン乎積ンテ増ス事ナキ宝ヲ以テ慾ニ充テ用ニ取ラハ尽ル期アリ之レ可トスヘカラス分限ノ大小ニ依ルト雖モ其有ヤーニスルハ不可ナリ先ツ其有ヲ三分シテ其一ハ正貨（一円銀貨本位金貨惣テ古金銀貨モ亦ヨシ古貨ハ鑄造費用等凡百分ノ二斗リノ益アリ）ニシテ府庫ニ積ミ非常ニ備フヘシ其一ハ貸付テ息ヲ取り用ニ充ツヘシ貸付ニ種々アリ動産不動産ノ抵当貸シ沽券地券公債証書モ其一ナリ采貸シモ亦然ルヘシ（前ニ悉ク貸金ノ不利ヲ述ヘ此ニ又三分一ノ貸付ヲ唱フルハ其説矛盾スルニ似タリト雖モ世多ク其ノ有テ有テ貸金トナシ永久ノ家禄ト心得營業トスル者多シ之ヲ憂テ迷タルニテ大金所有ノ者ハ何レ其有ヲ三分ニセハ左右相助ケテ大ナル過チナカルヘシ）其一ハ物ニ代ヘ置クヘシ物ニ動産不動産ノ別アリ米穀塩噌綿布糸絹器械調度共ニ皆動産ニシテ其品種枚挙スルニ遑アララス動産ハ府庫ニ納メ運

家屋ヲ抵当ト
為シ置クベシ

漕自由ノ利アリト雖モ火災盜賊ノ害アリ即チ商賈ノ売品ニテ商法ハ時々ノ昂低種々ノ懸引アルモノナレハ其人ニシテ可ナルヘク其人ニアラサレハ商法ハ為シ得ベカラザルモノトシテ暫ク之ヲ論セス

土地礦山ハ則チ不動産ナリ家屋（西洋ニテハ家屋ヲ不動産ニ属セリ）立木ハ不動産中ノ動産ナリ不動産ハ常ニ火盜ノ難モナク偶水害ノ患アルモケ所ニ依リテノコトナレハ永久ノ家禄トスヘキハ土地ニ限レリト云ツヘシ土地ニ耕地宅地等ノ区分アリ宅地ヲ有シ家屋ヲ造シ之ヲ貸置家税ヲ取ルモ亦米ニテ極ムルヲ利アリトス之レ貨幣ノ品位交換ノ損失ヲ受ケサル為ナリ併ナカラ家屋ヲ貸置クハ其利多シト雖モ破損ノ患アリ火災ノ難アリ且家税催促等其勞モ亦少カラス依テ宅地ヲ貸シ其地税ヲ取ルヲ上策トス之レ損焼ノ害ナク地稅滞レハ家屋ヲ押ユルノ權アリテ家税ヲ取ルヨリハ其利劣レリト雖モ其勞モ亦少カルヘシ東京府下ニ於テ所謂地主ナル者ニテ家主タランヨリハ地主タルノ優レルニハ如カス

耕地ニ於テ自作地卸シ作地ノ別アリ自作ハ多少限アリテ余リ多作ハ為シ難キモノナレハ仮令其利ハ少クトモ卸シ作ニスルヨリ外ナシ卸シ方ニ歩卸シ石卸シノ別アリ居村ノ卸シ付ハ合盛ヲ以テ歩卸ニ致シ又他所ニ居テ懸作持ノ卸シ付ハ石卸ニイタシ用米ヲ収ムルナリ懸作ノ用米ニ村費等諸掛リヲ引去タルアリ引去ラサルアリ貢納モ親作ニテ持アリ

小作ニテ引受ルアリ是等ハ予テ切高取高ノ砌約定次第ナリ地券改正ノ上ハ石高ノ名義廃止ニ付石卸ハ相止ミ一般ニ歩卸ニ相成ルヘシ惣シテ掛高用米利合ハ貸金日間利息ヨリ見レハ僅カノモノニテ八朱沓歩杯ノ利息ニ当ルヘキモノニ非サレトモ常ニ分散ノ憂モナク大盜ノ難モナク非常ニ逢ヘハ風水旱蝗ノ害ナキニ非サレトモ頻年続モノニテモナシ唯不動産ノ不利タルヤ府庫ニ納ムヘカラス移住ニ運フヘカラス持運フヘカラサルーツノ不利アリト雖モ永世不朽ノ家禄トスヘキモノハ土地ニアラスシテ亦何ソ豈外ニ求ムルアランヤ先般地租改正ノ令出テ、頃日頻リニ地理ノ検査アリ不年ニ地租改正アルヘシ（一字不明）改正ノ旨趣ヲ考按スルニ従前租税ノ偏重偏輕ヲ内一ナラシメ有余ハ之ヲ取り不足ハ補ハントノ旨趣ナルヘシ今地租改正ノ際ニ當ッテ損益得失ヲ察シ土地田畑ヲ求メ置キ後來營業ノ利ヲ計ラハ豈有益ナカラスヤ

彼によれば、政策の第一は「府庫ニ積ミ非常ニ備フヘシ」として正貨準備に三分の一をあて、他は貸付分として三分の一を充てる。「其ノ有拳ケテ貸金トナス」ことは危険があり、またその担保として動産、不動産をあてる。このほかに物価上昇に対応するものとしてまた三分の一は物品をもって当てる。これも物産、不動産の別があるが、動産は取扱いに専門的知識が必要であり、不動産とくに「土地ハ永世不朽ノ家禄トスベキ」であり、「宅地ヲ貸シ其地税ヲ取ルヲ上策トス」とか、また「土地田畑ヲ求メ置キ後來營業ノ利ヲ計」ることが望まれている。こうして彼の意図するところは、銀行経営の健全化を目標としながら、その基盤として、貨幣の側から社会経済と個人経済の

安泰をも同時に考えるのであった。換言すれば、物価騰貴による銀行経営の不安を救済するために、この論著が書かれていて、とくに物価の問題は貨幣の側から取りあげられている。

このような彼の研究方法論については、一つの卓見であると評価がなされうる。というのは、伊牟田敏夫氏の「明治維新史研究講座」第三巻において示されたように、近世の物価史研究の第一の課題は、市場形態に関する分析をふまえた物価変動の追求が必要であり、また第二の課題は物価問題の性格を規定するために、貨幣的要因の重要性を考慮に入れるべきことと述べているが、小幡のこの論考は、後者の貨幣的要因に主力をおいて追求しようとしている。物価変動と貨幣との歴史的関連をとりあげようとする着眼点は、先駆的な考えであるといえる。もともと経済学では、古典学派の時代から「質の換算」という思考方法に取り組み、ヨーロッパの近代には、物価指数の算定が論議された。いわゆるデフレーター^①の検出がなされたが、この点については作道洋太郎教授の「近世封建社会の貨幣金融構造」に示される^②。少くとも貨幣価値や物価変動の比較、換算の基準が求められるが、小幡和平の論拠は、銀行経営の面からであるとはいえ、その努力がなされている。

- 1、作道洋太郎著「近世封建社会の貨幣金融構造」第十八章価格変動と貨幣政策との関連（同書五五二頁）

七、渋沢栄一の国立銀行経営論—とくに小幡文庫の中に 発見された渋沢の「銀行説」—とその影響

渋沢栄一の経済あるいは経営についての理念、組織運営についての基本的構想は、数多くの資料から知ることができる。彼の全集の編さん主任であった土屋喬雄氏はこの点について次のように正しく述べている。^③

彼が多く語ったのは、抜群の理解力と記憶力と雄弁をもっていたのも一因だが、多くの人々が、大指導者でもあり大人格者でもあった渋沢から、多く聞くことを欲したからでもあった。彼は多く語らしめられたのである。さらに彼が多く語ったのは、自己の指導理念とそれによって活動した事歴について、それが日本の発展に貢献するところがあった、この自己満足と道義的誇りをもっていたからでもあると私は考える。

いずれにしても、日本の経営理念史上渋沢栄一の地位は巨大であると私は考える。日本の商業資本主義の段階から、近代資本主義への転換期、近代資本主義の成立、勃興期から、その爛熟と大恐慌の時代まで彼は活動したが、彼こそまさに民間における最高指導者であり、「財界大御所」「財界大世話役」の呼称の示すように、日本資本主義の総資本の立場に立ちつづけて物を考え、かつ事を行なった人であったと考えらるべきである。このような性格をもった資本家的経営者には、五代友厚、中野武蔵、郷誠之助、和田豊治、井上準之助、池田成彬などの人々もあげられるであろうが、そのスケールにおいて最大の人は渋沢であろう。

以上は彼の著「続日本経営理念史」の中の第二編、「儒教倫理を基本とする経営理念」の第一章、「澁沢栄一の経営理念」の「むすび」の文章の一部である。

澁沢栄一の老大な資料は、彼の全集に納まっている。国立銀行についてまとめたものとして、二つをあげることができる。その一つは、同全集第四巻の「維新以後に於ける経済界の発達」②の中の、とくに「第二節、貨幣制度の整理」③と「第四節、銀行の発達」④である。ここでは国立銀行の形成が概説的に、しかも批判的に述べられている。他の一つは「中外銀行説」といわれるものである。これは「澁沢栄一伝記資料」第四巻に納められている。この本源の資料は第一勧業銀行所蔵版本⑤であって、国立銀行の理念、組織、運営について、具体的に述べている。

まず前者については、自らは実業家であり、「私には学問がないから判断が付かなかった」⑥とわが国の国立銀行形成の方法論として英国の中央銀行のイングランド銀行方式でいくか米国の国立銀行制度によるべきについては論を下していないが、福地源一郎に米国の国立銀行の条例を邦訳せしめ、それを基に起草させ、それに自ら修正と加えたのが、「明治五年発布の「国立銀行条例であります。」と述べ、引き続いて、其時の国立銀行の創立は、是れによって不換紙幣を金貨で兌換し得るやうにしようとする理想であった。そこで第一銀行が組み立てられ、続いて第二、第三、第四、第五と五行創立した、……（中略）けれども其理想が不安心であったから、続々と跡から続いて来ると云ふことがなかった」その後数年を待たないで欠点が著しくなり、「其頃の我国の金貨の所有高は極めて微々たるものであって、小資本の銀行を四五行創立して、其準備の金貨を以て金貨制度を維持しやうと思ったのは、恰も一杯の水で一車の薪の火を消さうとしたと同じく、市場に於て少しく金貨が高くなると、銀行の紙幣を直ぐ兌換される極めて便利なる引出口になって居る。……是は敢て銀行の紙幣を信じないのではなくして、貿易上の結果金銀比価の関係である。故に日本に於て斯様な小額の金で金貨制度を立てたのが馬鹿氣た事である。……」⑦と自ら説明している。同じく第三節「国立銀行営業上の困難と銀行条例の改正」の最初には「此銀行が出来たなら平素懷抱する理想が直ちに行はれると思うたのは少し智恵のない分別で、今日から見ると恰も底に孔の開いて居るのを知らずに、袋に物を入れたようなものであった」⑧と述懐している。

次に後者の、「中外銀行説」において、彼の国立銀行の在り方についての考えをみよう。それはその「緒言」において本書の成立するに至った理由を、次のように述べている。(10)

維新已降官府夙ニ理財ノ大計ヲ以テ急務ト為シ、旁ネク欧米ノ財政ヲ搜リ之ヲ講究シテ其得失ヲ詳カニシ竟ニ米國ノ法ニ仿フテ国立銀行條例ヲ制定シ明治壬申ノ季秋之ヲ天下ニ頒告ス、此時ニ當リ世人未タ銀行ノ法ヲ了解スルニ至ラス、故ヲ以テ懿制ノ下因循日ヲ曠フシ未タ之ニ応スル者アラス、茲ニ於テ余非オヲ顧ス……遂ニ第一国立銀行ヲ設立スルヲ得タリ、……自後日ニ励精ヲ加ヘ事未タ徧ク挙ラスト雖トモ業稍ヤ端緒ニ就ク、而シテ之ヲ米國銀行ノ如キ整齊ナル者ニ較ヘ、固ヨリ精粗ノ別ナキニ非スト雖トモ、庶幾クハ我邦銀行ノ嚆矢ト称スルニ足ル者ナリ、……偶マ鹿児島県ノ人種田誠一ナル者アリ、官学ノ期満ルニ由テ米國ヨリ帰ル、便チ之ニ就テ我カヲメニ再遊ヲ詢リ、且弁スルニ三年の学資ヲ以テシ、甲戌ノ四月米國ニ再往セシム……此際種田子期満チテ帰ヲ報シ、其実践觀訪ノ事ヲ挙ケテ縷陳遺サス、大ニ余カ旧望ニ副ヒ且前日ノ委付ニ負カサルヲ致セリ、……今同氏ノ縷陳スル所ヲ筆録セシメ、之ヲ閱シテ以テ大ニ裨益アルヲ覺ヘ、

印行シテ以テ同業ノ者ヲ博セント欲ス……

明治10年丁丑7月

澁沢栄一識

こうして本書は、澁沢の意を体して種田誠一がアメリカに再び渡航し、銀行経営の実務を勉強して帰国し、その報告を元にして成立したものであり、本書は「澁沢栄一閱、種田誠一口演、大沢正道筆録、須藤時一郎校正」^⑪となっている。しかし「緒言」の中に澁沢自らが述べるように「大ニ余カ旧望ニ副ヒ」とあり、澁沢の考え方が殆んどここに示されていると解することが出来る。

さらに本書中の「目録」は、「合衆国銀行総説」、「紐育府第四国立銀行体裁並館屋部位略図」、「コルレスポデンス法略説」、「株式取扱所事情」、「割引通法」、「交換所事情」、「内国銀行創立説」、「清国上海銀行事情」から成立している。ところで「内国銀行創立説」については、「澁沢栄一著」^⑫と銘記されてある。また「清国上海銀行事情」も同じく澁沢栄一著^⑬となっている、そして本書の「中外銀行説一斑」の出版は、「明治11年5月16日出版御屈」とされ、それには「著述、東京府平民澁沢栄一、東京六大区一小区深川福住町四番地。口演、鹿児島県士族、種田誠一、同二大区五小区芝八軒寺町七十二番地寄留。筆録、岐阜県平民、大沢正道、同第一大区十五小区北島町一丁目五番地寄留」となっており、発行は「製紙分社」で定価廿五銭であった。

以下において、まず本書の中に示された「澁沢栄一著、内国銀行創立説」について、その立場を明らかにしよう。

イ、内国銀行創立説

澁沢栄一の国立銀行の形成論については、この「内国銀行創立説」と、小幡和平の蔵書の中に私の発見した「銀行説」とがある。後者は、銀行説の終りに「明治9年12月、第一国立銀行頭取、澁沢栄一」とあり、和紙に筆で記述されている。この両者は、著述の題目が類似しているが、成立の年代が後者がやや早いのであり、両者の類似性と相異性およびその関係について明らかにしたい。

まず前者について記述する。

内国銀行創立説

澁沢栄一著

華士族禄券ノ制度ヲ公布セラレシヨリ己来国立銀行ノ開設ヲ謀ルモノ隆統四方ニ興起シ、而シテ我第一国立銀行ノ稍実験アルヲ信認シ、為ニ弊行ニ来ツテ其結社ノ弁法業経ノ要旨等ヲ詢議セラルル者只十数人ノミニアラス、余其策ノ治図ニ適シ且其志ノ盛篤ナルヲ喜フヲ以テ敢テ浅劣ヲ辞セス之ト対見スルニ当テ其利害ヲ痛論シ其経画ヲ詳説シ知テ言ハサルナク言テ罄ササルナシ、既ニシテ対見日ニ繁ク遂ニ懇懃備悉スルノ暇ナキニ至レリ、殊ニ其算数ニ係ル者ハ晤談ノ以テ尽ス所ニアラス、因テ以為ラク今其説了スル所ヲ筆シテ一書ト作セハ豈徒タ晤談ニ換ルノ便アルノミナランヤ、更ニ其一層精確ヲ為シ、詢問ニ対シ遺蘊ナキヲ得ン乎、此ニ於テ遂ニ此一書ヲ筆シ往日語談スル所ノ者縷縷ヲ記シ、又仮ニ一銀行創立ノ式様ヲ設ケテ其職員ノ制置営業ノ要領会計ノ方法等ヲ備載セリ、是レ実ニ余カ区々ノ婆心ニシテ来者ノ詢問ニ負カサラン事ヲ欲スル所以ナリ

夫レ銀行ノ本務ハ理財ノ大機関ヲ運用シ貿易ノ大資本ヲ流通シ常ニ通商工作等ノ諸業ニ媒介シテ其公益ヲ興サシムルヲ要スレハ、其進止ハ常ニ金融ノ途ニ影響シ、其得失ハ毎ニ商佑ニ痛痒セサルヲ得ス、而シテ又紙幣ヲ発行スルノ特權ヲ有シ、嚴正ナル条例ヲ奉シ、精密ナル記簿ヲ用ユルヲ以テ其義務ト責任トノ重大ナル固ヨリ他ノ商賈者流ノ比ニ非ルナリ、今銀行ヲ創立セント欲セハ先ツ此理由ヲ体認シ、實地ノ精勢ヲ詳察シ而後根理ニ從テ基礎ヲ画定シ、其實際ヲ酌量シテ業經ヲ開設スルヲ要ス、稍此順序ヲ為シ以テ其營業ニ就クニ當レハ凡ソ事ニ処スル謹重ニシテ輕動ヲ慎ミ、一朝ノ私利ヲ營マスシテ遠大ノ公益ヲ図ルヘキナリ、然レトモ亦日常ノ細務ヲ忽視スル莫ク何等ノ瑣事ト雖モ必ス其顛末ヲ整頓シ、日月勤營ヲ積ミ漸ク精熟ノ境ニ到ルヲ得ヘシ、若シ之ヲ舍テ其濫リ法則ヲ弄シ、徒ラニ外飾ヲ修ムルトキハ進テハ浮華輕進ニ失シ、退テハ私利小計ニ誤ラサルヲ免レスシテ、愈進メハ愈危ク愈退ケハ愈陋テク、畢竟昌盛ノ域ニ達スルヲ得サルノミナラス恐クハ其極所ニ抵テ各本体ヲ保ツヘカラス、然而シテ此ノ如キ得失アルハ實ニ棟梁タル人ノ当否如何ニ在ルノミ

余嘗テ私カニ世間ノ人材ヲ我營業ノ為メニ品評スル者アリ、請フ試ニ之ヲ言ハン、凡ソ才学ヲ以テ自ラ任スル者ハ多クハ實際ノ俗務ニ通明セス、其才学ヲ特テ画策創業ヲ事トシ小利ヲ營ムヲ屑トセス、功績ノ世ニ顯ハレン事ヲ求ム、其志ハ壯ナリト雖トモ此輩ヲシテ銀行ノ營業ニ從事セシムレハ則其事業ノ未タ一邑ニ洽ネカラサルヲ問ハス反テ邦國ノ財務ヲ利セント欲シ、大ニ章程ヲ立テ故ラニ規則ヲ設ケ頗ル皮相ヲ修メテ其實ハ迂拙ニ屬シ、以テ安全堅固ナル事ヲ保ツヘカラス之ニ反スル者ハ其實際ノ慣習ニ依テ俗間ノ事務ニ通明スト雖トモ其實ハ惟タ巧ミニ利殖ヲ図リ細カニ銖銖ヲ収メ算珠ヲ上下スルニ過キサルノミ、如シ此輩ヲシテ銀行ノ營業ニ從事セシムレハ則其外ニシテ時務ニ暗ク内ニシテ事理ニ明カナラサルヲ以テ、進テハ止ルヲ知ラス、伸テハ屈スルヲ覺ラス、常ニ一定ノ方向ナキ事ハ猶航海者ニ針路ナキト一般タル者ナレハ、其貨殖ニ勤勞シテ毎ニ優利ヲ收獲スルト雖モ若シ一朝風浪ニ遭ヘハ忽チ進止ニ迷シ、幸ニ岩石ニ触レテ擱ケスンハ狂濤ニ隨テ漂流スルアルノミ、是亦寔ニ危フカラスヤ二者斯ノ如ク長短得失アツテ其兼全ナル者ハ殆ント罕ナリ、此ニ由テ之ヲ看レハ蓋銀行ノ業ハ畢竟營ミ能ハサルノ難キ者ト謂フヘキカ、曰ク否、是偏ニ其弊害ヲ言フモノナリ、若シ其盛利ヲ言ヘハ更ニ他ノ商佑ノ及フ可カラサル熙々雍々タル情態アツテ茲ニ論スル所ト一瞬境ヲ異ニシ猶彈雨劍電ノ血戰場ヲ出テ、光風霽月ノ清樂郷ニ入ルカ如シ、然レトモ盛利ハ弊害ト反對ニシテ得失ト表裏スル理固ニ然ル所ナレハ、今盛利ヲ享ケントセハ先ツ弊害ヲ防カサルヘカラス、得ルヲ計ラントセハ是又失ヲ省ミサルヘカラス、故ニ以テ之ヲ論スルノミ、豈銀行ノ業ハ其難キヲ以テ營ムヘカラサル者ト為サンヤ

然則方今其業ヲ營マント欲スル者ハ前ニ論スル所ヲ以テ營業ノ大略ヲ明カニシ、次ニ説ク所ヲ以テ人材ノ如何ヲ審カニシ、而後立社ノ大要ヲ裁定シ營業ノ程度ヲ設立シ殖益ノ予算ヲ額設シ、此ヲ以テ實際ニ着手スルヲ得テ毎季実験ヲ經テ其成跡ヲ確察シ、其得失ノ情由ヲ鑑省シ以テ改良進歩ニ懈ルナクンハ則漸次実効ヲ奏シ、遂ニ以テ非常ノ目的ヲモ起シ邦國ノ財務ヲモ論スルヲ得ヘシ、其レ此ノ如クシテ初テ能ク条理ニ基キ實際ヲ涉リ、卑キヨリ高ニ登リ、小ヨリ大ヲ成シ、鍛鍊情熟ノ効ヲ全フスル者ト謂ヘキナリ

然レトモ此僅々ノ數言ニシテ其細大ヲ曲尽スルニ足ラス、故ニ別ニ營業ノ提要計算ノ大目等ヲ記載シ一併參閱ニ付ス、幸ニ諸君此書ニ由テ得ル所アレハ庶クハ上ハ聖明ノ治國ニ負カス下ハ銀行

ノ本務ニ恥チサルヘキカ、西人言アリ、曰、羅馬府城ハ一日ニシテ修成スルモノニアラスト、宜ナルカナ余ハ銀行ノ営業ニ於テ之ヲ見ル、因テ添ユルニス一言ヲ以テス

本書は、当時国立銀行の設立希望者が増加してきて、第一国立銀行に参って「其結社ノ弁法業経ノ要旨」について教示をうけたが、その要旨を一冊の書物にまとめたものである。これによって単に説明することよりも一層精確に詳細に銀行の創設・運営・計理を述べることを計った。

まず、銀行の理念である本務を明らかにして、理財の大機関を運用するものであり、「常ニ通商工作等ノ諸業ニ媒介シテ其公益ヲ興サシムルヲ要ス」べきものとし、そして「一朝ノ私利ヲ營セスシテ遠大ノ公益ヲ図ルヘキナリ」と規定する。銀行存在の公的社会的意義を示して次いでその運営は「金融ノ途ニ影響シ」また商業を左右する。しかも「紙幣ヲ発行スルノ特権」があり、精密な記帳がなされ、「其義務ト責任トノ重大ナル固ヨリ他ノ商賈者流ノ比ニ非ルナリ」との重要性を述べる。銀行の創立には、このことを体認し、そして実際の状勢を詳察して基本的に企画して、実状にあてはめて営業を行なうべきである。具体的な銀行の日常業務には、「日常ノ細務ヲ忽視スル莫ク何等ノ瑣事ト雖モ必ス其顛末ヲ整頓シ、日月勤営ヲ積ミ漸ク精熟ノ境ニ到ルヲ得ヘシ」とされ、徒らに「外飾」に走るときは結局経営の危機に至るのであって、銀行経営には責任者の適格性が問題である。自ら「才学」をそして任じて、実地を離れて老大な計画を案じ、「功績ノ世ニ顕ハレン事」にのみ走るならば、「皮相」に流れて、「其実ハ迂拙ニ屈シ」経営ノ健全化は不可能に立ち至る。しかしその故にこれと反対の者が銀行経営に従事すれば、実地の事務に通じ算盤の計算に適しているのみであって、外の経済社会の「時務」に暗く、内の銀行経営の「事理」にも明らでなく、恰も「航海者ニ針路ナキ」状態に等しい。貨殖に勤めて利益をあげても「一朝風浪ニ遭ヘハ忽チ進止ニ昆迷」するだけである。かくていずれに流れても二者長短得失があつて危険である。これは偏に弊害の側を述べたのであり、銀行業には他の職業には及びえない優れた点もあり、このためにも弊害を防ぐことが肝要である。

かくて銀行業の経営を創めるに当っては、まず前述のように、経営の理念、「営業の大略」を明らかにし、次にその人物を吟味し、第三に創業の趣旨を定めてその規模、機能を明らかにし、収益の計理面を算出する。これによって実際に銀行の創業に着手し、そして每期その決算を適確に把握し、吟味反省を加え、改善策を押し進める。こうして漸次実効が現われると共に、一国の財政・金融も論ずることが出来る。銀行経営は、条理に基いて実際の運営が正しく施され、経営努力が稔ってゆく。正にローマは一日にして成らずの格言のように銀行業も長い目をもって成育に励んでいかなければならない。

以上が澁沢栄一の銀行経営論における基本的方針であり、その具体的な問題点については別に示すことにしている。

ロ、「銀行説」

前に述べたように、澁沢栄一の「銀行説」が、小幡和平の蔵書の中に納められている。しかもその筆で和紙に書かれた本書が、明治九年として記されている。これらの理由は確実には明らかにで

きない。しかし次のように推察される。和紙に書かれたその筆跡は、小幡の他の蔵書のそれと同一であり、澁沢自身の筆跡ではない。とすると、恐らくは小幡が国立銀行の創設の準備のために、澁沢栄一のもとに行き、国立銀行の内容、経営あるいは創設の手続き等について学んだことと想像される、その際に澁沢から伝授されたのが、この「銀行説」であり、それを小幡が筆写したものであろう。前記の「内国銀行創立説」の初めの部分に「国立銀行ノ開設ヲ謀ルモノ隆統四方ニ興起シ、而シテ我第一国立銀行ノ稍実験アルヲ信認シ、為ニ弊行ニ来ツテ其結社ノ弁法業経ノ要旨等ヲ詢議セラル、者只十数人ノミニアラス」⑭とあるのも、これを裏書きするものである。

もしその通りであるとすれば、本書が前記の「内国銀行創立説」のもとをなす始原の原稿の役割を果たすことになるかと解せられる。即ち同書に「以為ラク其説スル所ヲ筆シテ一書ト作セハ豈徒タ暗談ニ換ルノ便アルノミナランヤ、更ニ其一層精確ヲ為シ、詢問ニ対シ遺蘊ナキヲ得ン乎、此ニ於テ遂ニ此一書ヲ筆シ往日晤談スル所ノ者縷縷之ヲ記シ、又仮ニ一銀行創立ノ式様ヲ設ケテ其職員ノ制置営業ノ要領会計ノ方法等ヲ備載セリ……」⑮と述べる意考にも合致する。

これは、また次に述べる「銀行説」の中に「世ノ経済ヲ談スル者ハ多ク国立銀行ノ創立ヲ企望シ而テ我第一国立銀行ノ聊カ此業ニ実験スル処アルヲ以テ其営業ノ順序及ヒ利害得失ノ原由ヲ詢問セラルル」の文章とも符合する。前記の「内国銀行創立説」は、「澁沢栄一伝記資料」に納められているが、この「銀行説」は、まだ小幡文庫にのみ写本のままに残されていて、未公開である。ここでは、その全文を掲げてその内容を公けにするのであるが、これと比較検討する意味で前記の「内国銀行創立説」も掲げた次第である。

この意味において、以下「銀行説」を掲げたい。当時の澁沢の銀行についての直接の指導書として、貴重な史料であり、⑮その後のわが国の銀行形成の指針になった。

銀行説

華族禄券ノ制公布アリシヨリ世ノ経済ヲ談スル者ハ多ク国立銀行創立ヲ企望シ而テ我第一国立銀行ノ聊カ此業ニ実験スル処アルヲ以テ其営業ノ順序及ヒ利害得失ノ原由ヲ詢問セラルルヤ頻リ二十数人ニ至ル余ヤ其企望ノ能布政ノ要旨ニ適スルヲ喜ヒ公私ノ為メニ其挙ヲ賛成スヘシ然レト雖モ銀行ノ業タル之ヲ通常ノ商法ニ比フレハ甚易キニ似テ実ハ難シ若シ其當産精確ニ出テ事業拡張ノ実アルモノハ蓋シ経画ノ根理ト運為ノ功用トヲ兼併スルニアラスンハ決シテ其完全ヲ見ルヘカラサルナリ今夫レ才学ヲ以テ自ラ任スルノ士ハ只全体経画ニ精シテ勉メテ其規模ノ盛大ナランコトヲ謀リ殊ニ其功用ノ夙ク世間ニ較著タランコトヲ期スルニアリ其事ニ処シ物ニ接スルヤ常ニ小利ニ拘泥スルヲ厭ヒ事業ハ未ター邑ニ普及セサルモ意見ハ早く全国ニ裨補セント欲シ是ヲ以テ章程先ツ備リ例規速カニ整ヒ皮相或ハ燦爛トシテ観ルヘキカ如キモ実務ノ運為ニ於テハ操行甚タ拙クシテ常ニ疎大ニ失スル弊ナキヲ免レス若シ或ハ實際ニ通シテ操行ニ長スル人ハ細カニ銖銖ヲ争ヒ巧ミニ貨利ヲ論シ經費之レ省キ殖益是レ勉メ目前ノ算珠上ニ賢ク以テ遺漏ナキカ如クナルモ恐ラクハ大体ノ経略ニ乏シク進テ止ルヲ知ラス伸ヲ屈スルヲ覺ラス其甚シキハ条理法制ヲ弁識セスシテ動モスレハ営業ノ針路ヲ誤リ常ニ能ク小利ヲ蒐集シテ年計余裕アルカ如キモ時トシテ不測ノ折曲アルヲ免レ難シ是才学ノ士ト操行ノ人ト互ニ得失長短アル処ニシテ能ク之ヲ兼備スル人ニ至

テハ殆ント罕ナリ蓋シ銀行ノ營業ハ他ノ商賈ノ忙促繁熱ナルカ如キ者ニアラス宜シク先ツ維持久シキニ耐ユヘキノ実体ヲ構ヘ而後進動己ムナキノ妙用ヲ存スヘシ是故ニ新創ノ銀行事務ヲ処スルニ当テハ初ヨリ事業ノ拡張スルヲ図ラス勉メテ望蜀ノ念ヲ抑ヘ而シテ能ク事務詢習熟スルコトヲ務トスヘシ叨リニ浮夸ノ見解ヲ以テ功業ノ速成ヲ務ムルト雖其實力ノ之レニ当ルニ足ラサル恥ハ只其害ヲ見テ利ヲ見ルヘカラス且其務ニ習熟セント欲セハ亦宜シク銀行ノ本業ヲ増進スルコトヲ勉メサルヘカラス於是乎先ツ日常ノ細事ヨリ修整シ恒久待ツアルヲ恃ムヘシ概シテ言ヘハ其銀行ノ創業ヲ図ル者ハ先ツ今般ノ得失ヲ大大計シ殖益ノ期程ヲ設立シ且其從事スヘキ科目ヲ予定シ此ヲ以テ順次營業ニ着手シ毎季実験ヲ經テ其成果ヲ檢覈シ精鍊ノ功ニヨリテ進歩ノ実ヲ效スヘシ漸ク振張シテ意ニ工商ノ源資ニ任シ始テ融通ノ便ト物産ノ利トヲ裨補スルヲ得ヘキナリ是ノ余カ公私ノ為メニ其創立ヲ喜ンテ其挙ヲ賛成シ而シテ此忠告ヲ呈スル所以ナリ然リト雖今此一喙一説能ク銀行実業ノ順序ヲ曲尽スルニ足ラサルヲ以テ別ニ營業ノ提要計算ノ大目ヲ記載シ併セテ參閱ニ供セント欲ス然リ是唯余カ管見ヲ說叙シテ聊カ新創者ノ便ヲ謀ラント欲スルモノナレハ素ヨリ之ヲ大方ノ具トスルニ足ラサルナリ仏人言アリ曰ク巴里府城ハ一日ニシテ之ヲ修成スルモノニ非スト余此銀行ノ營業ニ於テモ是ヲ見ル者幸ニ余カ忠告ニヨリテ其速成ヲ勉メテ真理ヲ誤ルコトナキヲ得ハ余カ区々ノ婆心モ聊カ以テ財理ノ万一ヲ裨補スルニ庶幾カラン乎

第一国立銀行頭取

明治九年十二月

澁 沢 栄 一

本書では、まず最初には銀行設立希望者が澁沢栄一の元にて、「營業の順序及ビ利害得失」について指導を受け、その着実な態度に賛成しながらも、銀行の経営は他の職業と違い難問題があり、その発展は企画と運営との双方の連関の適切性が要請されるとする。

次に経営者の適格性について述べる。これは前記の「内国銀行創立説」の所説と類似し、内容も同様であるが、表現は必ずしも同一ではない。「才学」と自任する者は企画力に通じ、小利を捨てて規模の拡大を計り、とかく世に現われることを期待し、銀行の諸規則を整備し、表面は整っているようでも、実地の營業は拙劣であって「疎大」に失する欠点がある。また反対に「實際ニ通シテ操行ニ長スル人」は、経費を節約し、目前の「算珠上」は賢明のようでも、「大略ノ経略ニ乏ク」小利を求めて「年計余裕アルガ如キモ」「不測ノ折紂アルヲ免レ難シ」、この両者を「才学ノ士」「操行ノ人」と呼んで互に得失長短がある。双方の長所を兼備したいが、これは殆んど稀である。

營業の基本政策に論及して、銀行業は他の商店のように多忙繁昌というわけにはいかないのであり、長期の忍耐強い努力の積み重ねの実体の上にこそ、経営発展の政策を樹立することが可能である。銀行創業時から拡大計画をたてるべきでない。まず地に足のついた銀行事務に習熟することから始めなければならない。徒らに速成政策を努めても実力が伴わなければ害があるだけである。

こうして銀行業の形成基盤として、上記の得失を十分に考慮して營業の大綱を予定し、プロセスを準備して順次營業に着手し、各期毎の決算を吟味検討し、その成果によって前進的に発展策を計るべきである。工商の根源の役割を果す意味がここにあり、「公私ノ為メニ其創立ヲ喜フ」由縁も

ここにある。なお銀行経営について、「營業の提要計算の大目」も別に準備して銀行創設者の便に役立てていきたい。正に「バリーは一日にしてならず」との言葉もあり、銀行業についても同じことが云いうるのであり、上記の忠告に従って努力してほしいとする。

以上において、明治九年の「銀行説」の概要を述べたが、これは引用した文章によって知られるように、二年後の印刷出版の「内国銀行創立説」とは、銀行についての基本的思惟様式において差異はない。

しかし両者を比較検討すると、後者は国立銀行の理念と機能を最初に述べ、その意義を明確にして、経営者の在り方を吟味し、経営規模と実体に論及して論旨を一貫させた著述である。こうして本書は国立銀行形成に関する序論ともいうことができる。

「銀行説」においては、直接に経営者を対象として記述されたものであり、銀行経営の容易なものでないこと、企画と運営の相互の重要性を強調し、経営の基本政策とくに創業時における安易な拡張に対する制御策、緻密な慎重な経営努力の要請を強調している。これらのことは銀行設立希望者に対する指針であり、本書の社会的に果たした役割は極めて大きいといわなければならない。

しかもこの澁沢の「銀行説」が小幡文庫に所蔵されているのは興味深い、何人かの銀行創設希望者が彼の元に参ったのに、その時の澁沢の所説が殆んど残存していない今日、この資料の意味が注意される。

小幡の銀行についての所論は、主として損益計算の手続き論である。国立銀行は、一見利益金が大きく獲得できるようであるが、実際の利子計算を綿密に試みると必ずしもそう樂觀できるものでないことを事例的に証明しようとしている。ことに紙幣発行制度の特権に伴い正貨準備が必要とせられ、紙幣の発行がやがて紙幣価値の下落を引き起すことをあげ、結局利益の低くなる点をも考慮すべきであるとする。これは彼が、国立銀行の創設について師事したと推察される澁沢栄一から銀行経営の容易ならざる難点について自らは具体的に計数をもって示したこともといえる。前述したように銀行は徒らに拡張政策をとるべきでなく、経営努力の慎重な積重ねを主張する澁沢の態度とその経営政策は規を一にするものと考えられる。

このように見てくれば、小幡和平の「国立銀行の利害」における銀行経営の基本的態度は、一見極めて慎重であって、むしろ消極的立場ですらあるように見受けられる。それは計数的に自らの立場を貫いた結果論として形成されたものと云うこともできるであろう。しかし同時にまた澁沢の右のような体験的立場からの指示に原因するものと推察することも可能である。

- (1) 土屋喬雄、続日本経営理念史、七〇——七一頁、および同氏、日本の経営者精神、一五三——一六七頁にも同趣旨がある。
- (2) 澁沢栄一全集、第四巻、一七四——二三二頁
- (3) 同 一八二——一八四頁
- (4) 同 一八六——一九九頁
- (5) 「中外銀行説」は、原本の中扉には、次のように記されている。

第一国立銀行蔵版

中外銀行説一斑 全

発行 製紙分社

澁沢栄一伝記資料、第四巻、二九四頁

(6)(7) 澁沢栄一全集、第四巻、一八七頁

(9) 同 一九一頁

(9) 同 一九〇頁

(10) 澁沢栄一伝記資料、第四巻、二九五頁

(11) 同 二九六頁

(12) 同 三〇五頁

(13) 同 三一〇頁

(14) 同 三〇五頁

(15) この点については、第一勸業銀行資料展示室の長沢玄光氏から種々有益な指導を賜わった。長沢氏は澁沢栄一の資料蒐集に多年掌ってこられた。

八、あとがき

以上において、小幡和平の「国立銀行の利害」を中心にして、その銀行経営論の大略について原文を紹介することに焦点をおいて述べてきた。その立論の位置づけを明らかにするために敢えて澁沢栄一と福沢諭吉の考え方も参考に叙述した。

当時の銀行経営の時代性について思い出されるのは、澁沢栄一が、第一銀行創立50周年に当たっての記念講演の中の一節である。「……此銀行創立後間もなく明治7年11月に至り、其車の片輪ともいふべき小野組は余りに過度なる進歩を図ったため、終に蹉跌を致して到頭破産の運命を見るようになりました。前に述べた如く、三井、小野、島田の三家に僅の他の株主が附随して成立った銀行の其大基幹の小野組の破産は、一方からは取引の関係、一方からは資本の関係で、第一銀行に取っては実に容易ならぬ打撃である。或る種類の人は最早第一銀行は潰れたと申された位であって、其頃の私と現頭取との苦心は50年の昔ながら宜しく諸君の御追想を請ひたいのであります。それから続いて生じて来たのは金銀比価の変化であつた。元来国立銀行の制度は、金札引替公債証書を納めて銀行紙幣の許可を得、其紙幣は金貨を以て引替へる制度であつたが、其頃東洋の金貨比価は常に動いて居る。……銀行の信用は如何に厚くても金貨の必要性其紙幣は交換される。……この金貨引換も小野組破産と相竝んだ第二の困難でありました。……」①というような追憶談の中に示された銀行経営の難問題があることである。この点について小幡は既に早く、明治7年ごろに、この問題の深刻さを具体的に計数的に切実に主張していた点は注目に値する。

だからといって、銀行経営の基本政策について、小幡和平は澁沢栄一の国立第一銀行の頭取と同じ基盤に立つ者として識見を高く評価すべきだとは、必ずしも云えない。大蔵官僚から金融界、財界の第一人者となった澁沢栄一と、単なる金沢在住の一地方銀行経営者とを、若干の箇書においてその立論の同一性を比較して類似性を発見することが出来たとて、またその点は評価すべきであるとしても、これをもって経営認識の意味づけを決定すべきではない。欧米の銀行経営についての広

い識見とわが国経済の運営と動向について鋭い認識の持ち主である澁沢の見解と、たまたま若干の銀行の経営認識が一致したのである。

しかしここに彼の文章の全貌を紹介したのは、これは明治7年ごろに成立したものであり、時期的に可なり早い間に書かれたものであること、また銀行経営にとって重要な課題である紙幣発行の問題、物価の上昇の問題について見識を示していること②、とくに物価の上昇についての見解は、当時のこの種の優れた学者である福沢諭吉の「物価高下の事」において展開される論旨の水準と特に大きな格差をもって見るができないくらいである。これらは評価される価値がある。

なお澁沢栄一の「銀行説」は、たまたま筆者が金沢市の石川県立図書館で、小幡和平の文庫の中の数多くの文書を調べている際に発見したものである。第一勧業銀行の長沢玄光氏にも問い合わせ未公開のものとわかった。

また本稿は、先に発表した「金沢国立第十二銀行形成の地域的性格」（佐々木教授退官記念事業会編「社会科における教育と研究」昭和48年2月）の続篇をなすものである。

1、第一銀行史、上巻、九五八——九五九頁

2、この点については、新保 博、徳川後期の物価水準（国民経済雑誌に7—2、3（1973）。

クロウカー E.S、徳川後期における貨幣流通と物価（日本経済研究センター会報、169）1972が参考になる。

（なお、本稿の作成については石川県立図書館の古村氏に多大の御厚情を賜った、ここに謝意を表したい。）